

(執筆者の許諾を得て掲載しております)

2022年6月29日 日本経済新聞朝刊のコラム「スポーツの力」

編集委員 北川和徳

日本ライフル射撃協会が開催したビームライフル・ビームピストルのスポーツ体験射撃会取材した。いわゆる光線銃。資格や免許は必要なく、誰でも安全に射撃を楽しめる。とはいえ、形や重さは本物とほぼ同じ。国体でも少年種目として実施されている。

体験会には日本パラリンピック委員会（JPC）の河合純一委員長（47）も参加した。河合氏は全盲だが、ヘッドホンをつけてライフルを構えると音が聞こえ、狙いが正しいか否かは音の高さで判断できる。銃身を台に載せて撃てるなど実際の競技より優しい条件とはいえ、河合氏は計20発を撃って満点の10点を8度も記録した。

「音が高く変化するのは一瞬。ゲーム性があって面白かった。他の競技の選手が集中力を磨くのにいいかもしれない」。パラリンピック6大会に競泳で出場し金メダル5個を獲得した元アスリート。集中力が抜群なのだろう。視覚にハンディを持つ人は聴覚が研ぎ澄まされるので、このやり方で健常者より高得点が出るのは珍しくないという。

あらためて思ったのは、スポーツは障害の有無や内容にかかわらず、一緒に競い合っゲームや勝負を楽しむことが、工夫次第でいくらでも可能になるということだった。

同協会は東京五輪・パラリンピック以降、健常者と障害者の垣根を外す共生スポーツとしての取り組みを加速している。松丸喜一郎会長は東京パラリンピックで大きな学びがあったという。

例えばパラのライフル射撃は主に下肢に障害があるSH1クラスといっても状況は一人ひとり異なる。車いすの選手がいれば義足の選手、立って椅子で体を支えて撃つ選手もいる。どうやっても完全に公平な条件は望めない。だが、選手たちは真剣に競い合っ勝負を楽しみ、勝者はみんなでたたえあう。「パラの方がオリンピックの精神を体現していると感じました」。

同協会は2022年から、空気銃とビーム銃の全日本選手権を健常者と障害者が一緒に参加する大会とし、それぞれがペアを組んで出場するミックス種目を新設する。一緒に競技をしても順位はカテゴリー分けして付けることになるが、将来はその壁も取り払うことを目指したいという。

スポーツでは公平性の確保が競技の前提とされてきた。だが、多様性と公平性の両立は難しい。これからは、それぞれの条件の違いを認めたくえ、それでも競技や勝負を楽しめる新たな価値観が必要になるのではないか。そこにつながる取り組みとなれば面白い。